

りたて、その奴隷的な仕打ちには腹が立ったが、そのうち慣れてくると、マホルカをくれるし、休めといっ
てくれるようになった。

またトラックへ地方人や兵隊と七、八人で一緒に
乗って行ったことがあるが途中、用便のため車をおり
ると、兵隊がマンドリンをひき、それに合わせてダン
スをやる。トラックに乗ったら歌をうたうというふう
に、いつ接しても明るく朗らかである。こういう明る
さは一体どこからくるのだろうかと考えた。

それはスラブ民族という民族性とともに、社会の仕
組みで生活が保障されているためだろう。人間本当の
生き方はこれだと思った。

現在はまた見方がちがってきているが、シベリアで
見たときは正直そんな風に感じたことであった。

脛の傷、抑留生活の思い出

熊本県 大仁田 幹 夫

ニーハラシヨール小隊

武装解除されたとはいえ反ソ反共の思想で教育をさ
れ、帰国の自途も立たず、希望も目的も失った者同士
の集団ですから、作業に専念できるはずありません。
私自身もそうであったし、へつらいや要領を使わない
私達の小隊はソ連側からの評価も悪く、いつもノルマ
未完遂の状況でした。作業は主に伐採と鉄道建設に従
事しましたが、ニーハラシヨールボータの小隊として
きめつけられ、いつも転属対象にされ、随分あちこち
に回されました。ある時、鉄道沿線作業中でしたが、
三名を選んで小隊のためにとコルホーズの馬鈴薯と人
参を盗ませたことがあります。軍隊での訓練が物を
いってか、見事成功し、麻袋二袋一杯の成果があった
わけですが、線路下で分配中一般人に見付かり、ソ連

兵に露顯する結果となり、責任罰ということで三日間の営倉入りとなりました。営倉は夜だけということ、昼間は作業ですから、皆の警戒の下で昼寝ができたことが大変ありがたく思われたものです。

営倉といえ、後日ソ連要人が巡視に來た時、たまに夜間作業で貨車から土砂を線路脇に降ろす作業をしておりましたが、作業がはかどらず、その要人を持たせたといいことで再び三日間の営倉に入ることになりました。自他ともに認め、認めなければならぬ、ニーハラショーの小隊だったのでしょう。最後は懲罰大隊といわれるラーゲルまで落ちていくことになりました。

色気なしの食い気一方

飯盒もしくは空き缶を腰に下げスプーンを持つての作業が随分続きました。若い者だけの集団とはいえず、色気なしの食い気一方とはよくいったもので、よるとさわると食べ物の話だけ、この枕木が羊かんだつたら何日で食い終わるか、この石が餅だつたらという具合でありました。この当時はよく郷土料理の自慢話の花

が咲き、日本に帰つたら試食してみようと考えたものです。

こういう状況の中でも利口な者がいるもので、ソ連人に要領よく立ち振る舞い、煙草等を手に入れ一食分のパンと交換していました。私は換えてもらおう方で「マホルカ」マッチ箱一杯をパン一食分と約一か月ぐらい交換したものです。おかげで昼食はスープだけ、松の渋皮料理で満腹感を紛らわした経験を思い出します。きのこ等を食するのはいい方で、時にはネズミ、カエル、ヘビ等も食したことがあります。将に飢餓道そのものであります。

反軍闘争

収容所生活は、入ソ以来一定期間軍隊組織が維持され、階級意識が存続していましたが、作業班と所内勤務、将校と兵との間に多くの矛盾が衣食住にも表われ、いままら階級章などではあるまいと、反軍闘争が起り、所内民主化の闘いが始まりました。その中心的役割は皆から選ばれた反ファシスト委員会が果たすことになります。

零下三十度

風速一メートル毎に体感温度は一度下がるといわれ、シベリアの冬はしばしば零下五十度、六十度になることもあります。油断すると凍傷になります。人体の一部が凍り付くのです。

作業は零下三十度まで出役するのですが、動けば結構寒くないもので、湿度の少ないのも幸いしているのかもかもしれません。

風呂帰りのタオル等は瞬間にしてピンと凍ります。素手でドアの金具の取り手など握ろうものなら、皮膚を傷めます。作業現場でスプーンを使いながらスープを吸うときなどは、量が多いときは熱いのでさしつかえありませんが、少なくなるとスプーンが冷えて唇にくっつき皮膚が破れることになります。もちろん少なくなつた飯盒の中は凍りついてしまいます。

また野卑な話になりますが、大便、小便が凍ります。夜間便所に行くときは注意が必要です。用足しが大の場合、大体座る場所が殆ど同じところですから、凍りついた上にまた凍るといふことで、上部までうず高

く突き出している場合があるからです。便所の汲み取りは十字鍬とスコップともつこでできるわけですが、作業後はよく全身を払い落とさないと、部屋に帰りあたたまると臭気ブンブンということになります。

焚火もよくやりましたが、日本では経験できないことがあります。掌は熱くなっても手の甲は痛いほど冷たい。焚火の横に寝そべっていても衣類は全くしめらない、火の部分だけがこたつを切ったように落ち込むだけです。足に暖をとり、あたたまったなあと感じたときは靴底は完全に焦げている始末です。こういう具合ですから、私達の被服は誰もが全身総火傷の様相を呈していました。長く寒い寒い冬でした。

入院生活二か月

小雪舞う寒いある日、伐採作業に従事していました。が、手袋(当時手袋をこう呼んでいた)がしめついでタポール(斧)がすべり、手前の尖端が脛に食い込みました。出血も少なく、大した傷ではなかったのですが、抑留生活という非衛生な条件の中です。後が大変でした。たまたま脂肪分の多い松の実をたくさん食

していた関係もあってか、遂に化膿し、四十度前後の高熱にうなされる日が続き、とうとう入院、女医さんによる生の切開を受けましたが、のんびりできた二か月の病院生活でした。固くはありませんでしたが米の御飯あるいは白パンと、大きな鎌が二匹あて出されたことを今もはっきり記憶しております。

脛に傷持つ身ですが、シベリアの抑留生活の思い出は今でも脛の傷とともにあります。

ダモイ

点呼時か改めての整列かわかりませんが、その中でダモイ（帰還）の氏名発表が行われていました。私体が健全だったためなかなか呼び出されることがありませんでした。

昭和二十四年春、ダモイの発表が行われました。また選外だろうと考えていましたが、最後の方になって私の名が呼ばれるではありませんか。まさかと耳を疑ったほどでしたが、宙を飛んで前に出る自分の姿を別人のように思えたものです。人生六十余年、自分自身を忘れて有頂天になったのはこの瞬間だけで、二度

とこういう経験は味わえないでしょう。いろいろ思いが走り、幾夜か寝付かれない日が続きまして。いよいよ当日が来て、貨車にゆられてナホトカに集結しましたが、何年ぶりに海を眺めて感無量でした。ナホトカは多くの帰還兵で宿舍もまるで辛を洗うよう一度席をはずすと寝る場所がない状態でしたが、後何日かで日本に帰るということで我慢したものです。

ところがまたナホトカで半年の道路工事に従事することになりました。ハバロフスク地区からの帰還兵はしっかりとしているから動揺しないだろうということですが、褒められても喜べるものではありません。

遂に乗船の時が来ました。有名な日の丸梯団の後だったので乗船、上陸時の注意が徹底された記憶があります。私は中隊長の任務を与えられて乗船しました。

私は信濃丸で、昭和二十四年十一月一日に舞鶴に上陸しました。ところがここでも私達何人かはMPの監視下に置かれ、食事も便所も自動小銃つき、映画も見せない。日本に帰ってもいつ故郷に帰れるのか、それ

もわからず、不安の毎日でした。千円貰った小遣い錢も監禁同様の中では使い果たしてしまいます。幸いなことにいつまでかわからないと思つた監禁生活も一週間くらいで解けて、昭和十八年以来久しぶりに懐かしい故郷に多くの人の出迎えを受けて立つたのは、それから数日後でした。

寒さと重労働の抑留生活を

前にして

熊本県 家入 壮介

列車は北へ北へと大雪原の中を進んで行く。見渡す限りの雪原の中を列車は人間社会から遠ざかっていくように感じられた。牡丹江を発つてから三日目であらうか、列車は小さな駅に停車して、全員下車せよとのコンポイー（警戒兵）の指示で荷物をまとめて降りる。外は雪が二十センチ余積もっており、あたりは鉛色のもやがかかったよう、しばらく立っていると内側に

毛皮のついた軍隊の防寒靴を通して足に針を刺すような痛みを感じた。今までに経験したことのないような寒さである。雪の中既に多くの人に踏み固められた道を十分位歩くと大きな倉庫に着いた。裏の方に無線塔があり、農業機械倉庫の跡らしく、付近にトラクターの部品らしきものが残っていた。場所はどのあたりか全く見当もつかなかったが、だいたい後になってコムソモリスクの近くの駅であることがわかった。

思えば国境の町綏芬河からウスリースクまで約百キロ、ウスリースクからシベリア鉄道を北上してハバロフスクまで約百キロ、さらに二百キロ北上してコムソモリスクに至る。約千キロを北上したことになる。ここはドーフと呼ばれていた。場所割りをして大倉庫に入る。数百名は入る広さで今夜はここで宿泊することになり、早速雪を溶かし、薪を集め、残り少なくなつた米を靴下の袋から出して飯盒炊さんにかかる。思いの夕食を済ませる頃には日暮れとなり、電気のない大部屋は暗く寒く、人々は疲れ果てて言葉少なに土間の上に身体を横たえた。帰国の望みを完全に絶たれ、